

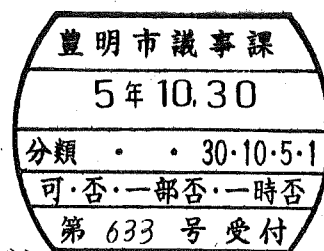
<参考>様式第2号

令和5年10月30日

豊明市議会議長 殿

行政等視察報告書

議員名 こんどうのぶお



令和5年度豊明市議会政務活動費にて下記のとおり行政等を視察しましたので報告します。

年 月 日	視察先	視察項目及び成果等
令和5年10月24日	栃木県栃木市	市民派の会にて視察
令和5年10月25日	群馬県桐生市	詳細は別紙レポートにて報告
		以下余白

(注) 別紙添付も可能とします。

(注) 本報告書は5年間公開します。

市民派の会視察報告書

こんどうのぶお

栃木県栃木市（令和 5 年 10 月 24 日視察）

1. 市の概要

・栃木市の最南端に位置し、静かなたたずまいの街である。東武鉄道と JR が乗り入れる栃木駅を含む 12 の駅に加え、東北自動車道と北関東自動車道の結節点として東西南北に交通網が広がることから、首都圏を含む多方面へのアクセスに優れています。東京駅へは最短 55 分、高速道路でも約 1 時間の距離にある。面積 33,150 km²、人口 155,281 人、総世帯数 66,879 世帯、高齢化率 32.3%、財政力指数 0.698、経常収支比率 84.7% である。

2. 視察テーマ「栃木市の空き家対策について」

・平成 25 年度より不動産団体と協力し「空き家バンク」制度の運用が開始。空き家・空地に関する情報を市のホームページで提供、売りたい・貸したいという方と買いたい・借りたいという方をつなぐ制度である。

あったか住まいのバンクの登録状況は平成 25 年度から令和 3 年度末までの実績は空き家を探している方の利用登録数は 2,445 件、空き家の登録数は 781 件、その内成約に至った件数は 554 件で、成約率は 73.9% となっている。利用者の年齢層は子育て世代から定年後に移住を希望されている方まで幅広い世代である。令和 3 年度から農地付き空き家の取り扱いを開始しており、これまでに登録が 14 件あり、うち 9 件が成約、5 件が交渉中である。バンク登録により空き家の家財処分をする際の補助金や、リフォーム費用に対する補助金もあり、空き家バンク成約の後押しになっている。

栃木市独自の取組として、空き家対策の対象となる戸建て住宅を概観目視により把握し、5 年に 1 回、実態調査の実施。その成果により空き家率が減少している。

平成 29 年度より「自治会と連携した空き家の早期発見・活用事業」として、協力する自治会を募り、空き家情報の用紙や位置を記載するための住宅地図を配布している。令和 4 年度まで 67 自治会の協力で 300 件を超える空き家の発見につながった。自治会には活動開始費用として、謝金の支払いがある。（1 万円＋世帯数×100 円）

移住促進の補助制度等についても積極的に取組をしている。空き家対策と移住定住施策の連携が栃木市の強みである。

2 つの移住体験施設がある。（蔵の街やどかりの家・IJU テラス蔵人館）

栃木市移住定住支援情報「とちぎで暮そ」や「KaKeRu」の発行。

栃木駅前の交流館には「移住定住支援コーディネーター」を配置し、相談・案内等をしている。

3. 視察の所感

栃木市は令和4年から8年の5ヵ年「栃木市空き家等対策計画」を策定した。栃木市の空き家率は14.2%、豊明市の空き家率は10%だが、今後ますます増え問題である。危険な土地開発をするのではなく、住宅地の空き家問題にしっかりと取り組むべきである。安心・安全なまちづくり。栃木市に学びたい。

豊明市においては町内会との連携がまだ不十分であると考える。謝金を出し渋ることなく問題解決に取り組むことが重要である。

以上

群馬県桐生市（令和5年10月25日視察）

1. 市の概要

桐生市は群馬県南東部にある市である。伝統工芸の桐生織を産する機業都市。市内に多くの産業遺産があり、桐生織物会館旧館を含む6件の日本遺産や、130件以上の国登録有形文化財が残されている。上毛かるたで「桐生は日本の機どころ」と詠まれるなど、奈良時代から絹織物の産地として知られる。面積274.45㎢、人口101,015人、人口密度368人、財政力指数0.57、経常収支比率96.5%、住みやすさランキング3位（群馬県内）

2. 視察テーマ「黒保根学園」小中一貫校について

開校までの経緯として黒保根地区の児童数・教職員の減少、複式学級があり教育の質の低下がみられた。黒保根小・中での一貫教育の研究をして令和4年度「施設一体型の義務教育学校」の開校を目指した。

「黒保根から世界を見つめ、世界へ羽ばたく人材を」を目指し、①少人数を生かした個に応じた指導（確かな学力の向上）②英語教育国際理解教育の推進 ③地域に根ざし地域と連携・協働の3つの柱を掲げ教育活動を行っている。

黒保根学園では発達段階を考慮し、9年間で3つの時期と捉えて指導を行う。前期ブロック（1～4年生）では、学級担任による生活や学習の基盤作りを大切にする。中期ブロック（5年～7年生）では教科担任制を導入し、難しくなる教科の学習を充実させ、内容の定着を図ります。後期ブロック（8, 9年生）では、義務教育終了後の出口（進路）を見据えた学力、能力を育むことを目指す。4・3・2制にすることにより、全職員が全児童生徒をよく理解し、共通理解のもと、指導に当たれるメリットもある。

また、黒保根学園は地域に根ざした地域理解教育が特色である。2, 3年生で学習した黒保根の街探検や社会科の学習が、後期ブロックの地元職業体験や総合的な学習の時間での探究的な学びにつながっていく。結論として義務教育の前半で学習した内容が、系統的に9年間生かされ、深い学びへと深化していくことが期待できる。英語や教科の学習でも、このような系統的な学びが期待できる。

中期ブロックの入り口である5年生から50分授業を行っている。但し、1, 2時間目は45分授業（3～6時間目は50分授業）を行っている。年間70時間、他校の生徒より多く学習を行う。

3. 視察の所感

通常の少人数学級と比べるとかなり少ない。しかしながら、地域との合同行事の実施、運動会、高齢者との交流、東京の「西町インターナショナルスクール」との連携等の工夫がみられる。今後は魅力ある教育により移住・定住が増え、街全体が活性化するような仕組みが出来ると良いと考える。